

## ウスイ語とボロ・ガロ祖語

藤原 敬介

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

## Usoi Tripura and Proto-Boro-Garo

HUZIWARA, Keisuke

Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

Usoi Tripura is a southern dialect of Tripura/Kokborok, which belongs to the Boro-Garo group of the Tibeto-Burman language family, and is spoken mainly in the Chittagong Hill Tracts of Bangladesh. In this paper, based on my own data, I have briefly described the phonology of the Usoi Tripura dialect. Thereafter, I have tried to compare Usoi Tripura forms with their corresponding Proto-Boro-Garo (PBG) forms found in the seminal work *The Comparative Phonology of the Boro-Garo Languages* by U. V. Joseph and Robbins Burling. My comparative work made it clear that Usoi Tripura is conservative in that it still retains the three-way contrast of stop initials and two types of liquids and tones, respectively, while it is innovative in that it has already done away with final liquids and replaced three types of final stops with glottal stops. Aside from these general tendencies, Usoi Tripura shows some peculiar characteristics such as the absence of voiced velar stops in native words and the voicing of PBG initial bilabial stops where their finals are liquids or dental stops in particular. Exhaustive lists of phonological correspondences between Usoi Tripura and Proto-Boro-Garo are also provided.

---

**Keywords:** Usoi, Tripura, Boro-Garo languages, Tibeto-Burman languages, historical linguistics

**キーワード:** ウスイ語, トリプラ語, ボロ・ガロ諸語, チベット・ビルマ諸語, 歴史言語学

\* 本稿は2009年1月15日にインド・メガラヤ州・シロンの東北丘陵大学 (North-Eastern Hill University) でおこなわれた第4回国際東北インド言語学会 (The 4th International Conference of the Northeast Indian Linguistic Society: NEILS #4) において, “Notes on Usoi Tripura phonetics and phonology” という題名で発表したさいに配布した資料のうち, ボロ・ガロ諸語の比較にかかわる部分を中心に加筆・修正したものである。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1. はじめに           | 2.1 音節構造       |
| 1.1 本稿の目的         | 2.2 音素         |
| 1.2 ウスイ語とは        | 3. ボロ・ガロ諸語との比較 |
| 1.3 先行研究          | 3.1 表記上の注意     |
| 1.4 本稿であつかう資料について | 3.2 対応例        |
| 1.5 本稿の構成         | 3.3 対応のまとめ     |
| 2. ウスイ語の音体系       | 4. おわりに        |

## 1. はじめに

### 1.1 本稿の目的

ボロ・ガロ諸語<sup>1)</sup> (Boro-Garo languages) の記述言語学的研究は、Grierson (1903) によって東北インドのボロ・ガロ諸語についての概観があたえられた。その後、ガロ語 (Burling 1961)、トリプラ語 (Pai 1976)、ボロ語 (Bhattacharya 1977) について、比較的まとまった記述があらわれたことをのぞけば、研究はあまりすすんでこなかった。ところが近年になって、バングラデシュのガロ語であるマンディ語 (Burling 2004)、インド・アッサム州のデウリ語 (Jacquesson 2005) やラバ語 (Joseph 2007) など、浩瀚な研究書があいついであらわれるようになった<sup>2)</sup>。そして、それらの記述言語学的研究を基礎にして、Joseph & Burling (2006) に代表されるような、ボロ・ガロ諸語の比較言語学的研究もさかんとなってきている。

しかしながら、本稿であつかうウスイ語については、いまだに十分な記述はなされておらず、ボロ・ガロ諸語における比較研究においても、とりあげられることがない。本稿では、筆者による臨地調査でえられたウスイ語資料を、Joseph & Burling (2006) でしめされたボロ・ガロ祖語の形式と比較対照する。そして、ウスイ語がボロ・ガロ諸語において、どのような音韻の特徴をもつかをあきらかとするを目的とする。

### 1.2 ウスイ語とは

ウスイ語 (Usui/Usoi) は、バングラデシュ人民共和国・チャッタゴン丘陵・バンドルバン県を中心に、インド・トリプラ州およびミゾラム州などでチベット・ビルマ系のウスイ人によってはなされる言語である。話者人口は資料によってばらつきがあるけれども、バングラデシュには2007年の数字として22365人 (Kim et al. 2007: 9)、インドには1981年の統計で1295人 (Sen 1993: 47) の話者がいるものとされる。ウスイ人は、インドではUchaiとしてしられ、指定部族 (Scheduled Tribe) ともなっている。

- 
- 1) ボロ・ガロ諸語は、ボド・ガロ諸語 (Bodo-Garo languages) と言及されることが多い。しかし、Bhattacharya (1977) や Joseph & Burling (2006) などのように、これらの言語を専門とする研究者からは、ボロ語やボロ・ガロ諸語とよばれることが普通である。そこで本稿でも、先行研究からの引用部分のをのぞいては、ボロ語、ボロ・ガロ諸語とよぶことにする。
- 2) ほかにラトローブ大学の Scino van Breugel 氏は博士論文としてインド・メガラヤ州のアトン語 (Atong) についての記述文法をほぼ完成させている。日本でも美作大学の桐生和幸氏がネパールのボロ・ガロ諸語であるメチェ語 (Meche) について、記述をすすめている。

ウスイ語はチベット・ビルマ語派のなかでボロ・ガロ諸語に属し、トリブラ語<sup>3)</sup> (Tripura/Kokborok) の南部方言に分類される。トリブラ語南部方言には、ウスイ語のほかにリエン語 (Riang) がある。附録に、Burling (2009) を参考として、ボロ・ガロ諸語におけるウスイ語の位置をしめした。

### 1.3 先行研究

#### 1.3.1 ウスイ語についての先行研究

トリブラ語はインド・トリブラ州の公用語であり、Pai (1976) や Jacquesson (2008a: 筆者未見) などに代表される文法記述がある。しかしウスイ語についての先行研究は、あまり存在しない。Walsh (n.d.: おそらく 1960 年代) は、イングランド語を見出し語とし、対応するバングラ語 (Bangla/Bengali) とウスイ語をバングラ文字表記した辞書である。前書きにはウスイ語の音声的特徴がしるされており、かなり正確に観察していることがわかる。ただし声調は表記されず、/u/ と /u:/ の区別が曖昧である。Kim et al. (2007) はバングラデシュ国内のトリブラ語諸方言についての社会言語学的調査報告である。附録として 23 地点・各 300 語程度の基礎語彙を収録し、IPA 表記している。そのなかにウスイ語の基礎語彙も 5 地点のものがふくまれている。ただし声調は表記されず、記録の精度にも疑問があるばあいがある。藤原 (2008) はウスイ語文法全体について概要を記述し、附録として民話を一編つけたものである。リエン語については、Riyang (2007) がある。これは、バングラ文字で表記されたリエン語の見出し語にバングラ語訳をつけた語彙集である。

#### 1.3.2 ボロ・ガロ諸語の比較についての先行研究

すでにのべたように、Grierson (1903) がボロ・ガロ諸語の研究に基礎をあたえた。その後は、Burling (1959) や Shafer (1974: 426-448) でボロ祖語を再構したり、ボロ・ガロ諸語を比較するところみがなされた。Benedict (1972) や Matisoff (2003) のように、チベット・ビルマ諸語全体をみわたり、チベット・ビルマ祖語を再構しようとするところみのなかで、ガロ語に代表されるボロ・ガロ諸語が参照されることもあった。しかしながら、チベット・ビルマ諸語の研究全体からみれば、ボロ・ガロ諸語そのものについての比較研究がなされることはまれであった。

そのような状況のなか、さきののべた記述言語学的研究がすすみ、ボロ・ガロ諸語についての比較研究も、あらたな展開をみせるようになってきた。なかでも Joseph & Burling (2006) は、ボロ・ガロ諸語のうちティワ語、ボロ語、ガロ語、ラバ語について、一次資料にもとづいて音対応を比較し、ボロ・ガロ祖語を再構するところみで、700 語ほどの再構形式を提案している。Joseph & Burling (2001) は、ボロ・ガロ諸語の声調について比較をおこなったものである。Jacquesson (2002) は、二次資料にみずからの調査資料をおぎないつつ、ボロ・ガロ諸語における主要な音対応を整理し、とくに二重母音の分布を中心に、ボロ・ガロ諸語の下位分類をしようとするところみである。Joseph (2007: 第 7 章 (489-663)) はラバ語とボロ語、ガロ

3) 一般にトリブラ語といえば、トリブラ州の州都・アガルタラ (Agartala) を中心とした地域ではなされる言語のことをさす。だから「トリブラ語アガルタラ方言」というほうが正確である。一方で、トリブラ語はトリブラ語で「人間のことば」という意味である Kokborok とよばれることがおおい。だから「コクボロック語」とよぶほうがいいかもしれない。しかし本稿では、「トリブラ人の言語」という意味で、単に「トリブラ語」とよぶことにする。

語を音韻・形態・統語の各面において比較対照したものである。Wood (2008) は二次資料によりながらボロ・ガロ祖語の形態統語論を再構しようとするところみである。Burling (2009) はボロ・ガロ諸語の低位分類を音韻面だけでなく、形態統語的側面も視野にいれておこなったものである。

このように、ボロ・ガロ諸語の比較研究は、近年さかんになってきてはいるけれども、本稿で中心的にあつかうウスイ語がとりあげられることはない。ウスイ語とちかい関係にあるトリブラ語についても、Jacquesson (2002) をのぞけば、あまりとりあげられていない。

#### 1.4 本稿であつかう資料について

本稿でのウスイ語は、筆者がバンドルバン県でTimothi Tripuraさん(1967年生)からききとったものである。資料としては服部(1957)をもちいて基礎語彙をまず収集した。それから、昔話を中心とした口語資料を十編程度分析した。これらの作業の過程で2000語程度の語彙を収集することができた。

Timothi Tripuraさんはバンドルバン県のなかでもルワンチャリ(Roanchari)地方の出身である。ウスイ人のはなす言語は、チッタゴン丘陵をながれるふたつの大河によって、二大方言にわけることができる。すなわち、コルノフリ川(Karnaphuli)流域の方言と、ションコ川(Sangu)流域の方言である。ルワンチャリ地方は、コルノフリ川よりの地域である。ションコ川の流域に属するバンドルバン地方の方言とは、若干の差異があるものとおもわれる。しかし、どの程度の差異があるかはあきらかではない。

本稿であつかうウスイ語以外の資料については、3「ボロ・ガロ諸語との比較」であらためてのべる。

#### 1.5 本稿の構成

本稿の構成は以下のとおりである。2ではウスイ語の音体系を略述する。3ではウスイ語とトリブラ語をJoseph & Burling (2006)にしめされたボロ・ガロ祖語およびその根拠となっているティワ語、ボロ語、ガロ語、ラバ語の形式とも比較対照する。4で本稿をまとめる。附録としてBurling (2009)によるボロ・ガロ諸語の分類をあげた。

## 2. ウスイ語の音体系

ウスイ語の音体系にかんする以下の記述は、藤原(2008: 87-92)の要点をまとめ、声調について複合語の例を追記したものである。ただし、分析の根拠となる最小対語の例は省略してある。

### 2.1 音節構造

ウスイ語の音節構造( $\sigma$ )は、子音をC、母音をV、声調をTでしめせば、基本的には(1)のようにあらわされる<sup>4)</sup>。

- (1)  $\sigma = C_0 \text{ə} C_1 C_2 V_1 V_2 C_3 / T$ ; ただし  $C_0 \text{ə}$  は副音節 (minor syllable)

4)  $C_0$ が無声子音のときにはるの音色がほとんどきこえないので、 $C_0$ のみがあると解釈しうる。そのように解釈すれば、音節構造は最大で $C_0 C_1 C_2 V_1 V_2 C_3 / T$ となりうる。

C<sub>0</sub>にはwとʔ, ŋ以外のすべての子音があらわれうる。C<sub>1</sub>にはʔとŋ以外のすべての子音があらわれうる。C<sub>2</sub>にはlとrしかあらわれない。C<sub>3</sub>にはʔとŋしかあらわれない<sup>5)</sup>。

母音については、単母音の語がおおい。二重母音について、後述するように、ai, au, ei, oiのみが確認されている。

声調については2.2.3で後述する。

## 2.2 音素

### 2.2.1 子音

ウスイ語の子音は表1にあげるとおりである。代表的な異音は丸括弧にくくってしめた。

表1. ウスイ語の子音

	両唇音	歯音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	p, ph [p <sup>h</sup> ], b	t, th [t <sup>h</sup> ], d	c [tʃ], j [dʒ]	k, kh [k <sup>h</sup> ], g	ʔ
摩擦音		(s)	ʃ		h
鼻音	m	n		ŋ	
流音		l, r			
わたり音	w		(y)		

表1にあげた子音のうち、sはʃの異音で、歯音が後続するばあいにはあらわれる傾向にある。yはjの異音で、前舌母音の前後であらわれる傾向にある。

gは有声閉鎖音にはじまる動詞から派生する形容詞<sup>6)</sup>の接頭辞としてあらわれるものをのぞけば、おそらくは借用語と推定される語にしか確認されない<sup>7)</sup>。周辺ではなされるインド・アリア系のバングラ語や、チベット・ビルマ系のマルマ語ではch [tʃ<sup>h</sup>]が存在するけれども、ウスイ語には存在しない。

ウスイ語の子音連続としては、表2のようなものが確認されている。語例が極端にすくないものは括弧にくくった。

表2. ウスイ語の子音連続

pl-, phl-, bl-	(tl-, təl-), (thl-)	(cəl-), (jəl-)	kl-, (kəl-), khl-, gl-	(ʃəl-)
pr-, phr-, br-	tr-, thr-, dr-	(cər-), (jər-)	kr-, (kər-), khr-, gr-, (gər-)	(ʃər-)

歯音と硬口蓋音についてはC<sub>1</sub>C<sub>2</sub>-による子音連続がほぼ確認されない。C<sub>0</sub>əC<sub>1</sub>-による形式

- 「道具」をあらわすkòlという語にだけ、語末にlをもつものが確認されている。この単語はトリプラ語でもkol (Debbarma 2002: 257)である。トリプラ語に本来あった末子音がウスイ語のなかにもものこっているめづらしい例であるといえる。
- ウスイ語には語類としての形容詞は存在しない。形容詞的な語は、動詞または名詞の下位分類と位置づけられる。ただし、ここで話題としている接頭辞gə/kə-は、ボロ・ガロ諸語では形容詞接頭辞としていられているので、本稿でも便宜的に形容詞とよんでおく。
- たとえば「速い」dòから派生する形容詞は、動詞の語頭が有声閉鎖音なので接頭辞がgə-となり、gədòという形式となる。「育つ」toは無声音ではじまるので、派生形容詞の接頭辞はkə-となり、「おおきい」kətoという形式となる。語頭にg-をもつ借用語の例としては「車」gari (←バングラ語gari), 「貝」guŋ (←マルマ語gúŋ)といったものがある。g-ではじまる語のなかには来源がわからないものもある。たとえば「怒り」gìŋや「指尺」garàといった例は、周辺言語に対応形式がみつけれない。

が子音連続に準じるものとみなせる。

## 2.2.2 母音

ウスイ語の単母音は表3、表4にあげるとおりである。括弧にいれた *-eŋ* は音声的には確認されない。ただし、脚注8でのべるように、音韻論的にはみとめる立場もありうる。

表3. ウスイ語の単母音 (開音節)				表4. ウスイ語の単母音 (閉音節)		
	前	中	後	-iʔ, -iŋ	-uʔ	-uʔ, -uŋ
高	i	u	u	-eʔ, (-eŋ)		-oʔ, -oŋ
中	e	ə	o			
低		a			-aʔ, -aŋ	

ウスイ語の二重母音は表5にしめすとおりである。\*をつけたものは、語例が確認できていないものである。

表5. ウスイ語の二重母音	
-ai, -aiʔ, -aiŋ	-au, -auʔ, (*-auŋ) <sup>8)</sup>
(*-ei) <sup>9)</sup> -eiʔ, -eiŋ	-oi, (*-oiʔ) -oiŋ

以上のほか、əをのぞくすべての単母音が、音韻論的に示差的な鼻母音になりうる。二重母音については、aiについてのみ、対立する鼻母音 ai が確認されている。なお、-ŋに先行する母音も音声的には鼻音性をおびるけれども、予測可能なので音素的ではない。

ボロ・ガロ諸語では、たとえば西田(1989: 1118)にのべられるように、母音調和現象が一般的にみられる。しかしウスイ語においては、第二音節の母音がiのばあいにはのみ、第一音節に予想されるəが同化してiとなる傾向がある。(2)に例をあげる。

(2) jikri 「おそれさせる」 < sə- 「使役接頭辞」 + kri 「おそれる」

## 2.2.3 声調

ウスイ語における声調としては(3)にしめす二種類をみとめる。

- (3) a. 中平調 (M) : 無標, Vでしめす  
 b. 下降調 (F) : 有標,  $\hat{V}$ でしめす

/ə/は独自の声調をになわず、無声化するか軽声のように発音される。声門閉鎖音(?)におわる音節はつねにややたかめのピッチで発音され、声調の区別はない。

最小対語・疑似最小対語の例を(4)にあげる。

- (4) a. ka 「サンダルを履く」 vs. kà 「のぼる」  
 b. kāmi 「村」 vs. kà 「ズボンを履く」  
 c. kaŋ 「喉が渴く」 vs. kàŋ 「類別詞：布」

二音節以上の語の声調については、たとえば(5)にあげるような例がある。声調のちがいが

8) /auŋ/ は確認されない。ただし、/aŋ/の自由変異として音声的には[auŋ]がきこえることはある。/aiŋ/と/oŋ/は例がすくなく、少数の例のうちほとんどはマルマ語などからの借用語であると推定される。だから-ŋにおわる二重母音としては、実質的には[eiŋ]しかない。ところで、音声的には[eiŋ]はほとんど存在しない。したがって、[eiŋ]は音韻論的には/eŋ/と再解釈しうる。ただし本稿では、実際の発音を重視して-eiŋとしておく。

9) 音声的に[ei]がきかれるのは、/e/におわる文法的小辭が文末位置にあらわれるばあにかぎられる。

がわかりやすいように、複合語の例をあげた。

- (5) a. MM: tauma「めんどり」 < tau「にわとり」 + -ma「女性接尾辞」  
 b. MF: taulà「おんどり」 < tau「にわとり」 + -là「男性接尾辞」  
 c. FM: tòifa「小川」 < tòi「水」 + məfa<sup>10</sup>「こども」  
 d. FF: tòifà「水を汲む」 < tòi「水」 + fà「上方移動の助動詞」, tòibù「川」 < tòi「水」 + bù「類別詞：川」

下降調のくみあわせである(5d)については、問題がある。tòifàは音声的には[toi<sup>31</sup>fa<sup>31</sup>]のように実現されるけれども、tòibùは音声的には[toi<sup>33</sup>bu<sup>11</sup>]のように実現される。このことは、fàは語としての自立性がつよい接語である一方、bùは自立性がひくい接辞であることをしめしているようにおまわれる。すなわち、tòifàは音声的には二語であるけれども、形態的には一語であり、tòibùは音声的にも形態的にも一語であると解釈できる<sup>11)</sup>。

下降調のくみあわせについては、このような問題が存在するけれども、以下本稿でおこなっていく比較にさいしては、ほとんど問題とはならない。比較の対象は大部分が単音節語であるか、副音節をふくむ二音節語であるからである。

### 3. ボロ・ガロ諸語との比較

#### 3.1 表記上の注意

本節では筆者によるウスイ語資料(以下Uと略す)を、Joseph & Burling (2006)(以下J & Bと略す)によるボロ・ガロ諸語と比較対照する。表記上の注意点は、以下のとおりである。

- ・ J & B にあげられているのは、ティワ語 (Tiwa: T と略す)、ボロ語 (Boro: B と略す)、ガロ語 (Garó: G と略す)、ラバ語 (Rabha: R と略す) およびその四言語を根拠として再構されたボロ・ガロ祖語 (Proto-Boro-Garó: PBG と略す) である。ときにアッサム語 (Assamese: A と略す) からの借用であることがしめされているばあいがある。
- ・ J & B から引用する語形は、J & B の附録にあげられた語形である。該当する頁数などは原則としてあげないけれども、その附録ではイングランド語訳の a, b, c 順に語形がなっているので、容易に検索することができる。そのような事情から、本稿でも日本語訳をつけずに、原文のまま引用する。ただし、わかりやすくするために、動詞や名詞などの語類を (vt), (vi), (n) などと追記したばあいがある。
- ・ J & B から引用している語形については、そこでの表記を踏襲する。注意すべき点は、以下のとおりである。

— 通則にあわない対応は丸括弧でくくっている。たとえば (38) に R p` (a) n とあがっているものは、PBG \*pol<sup>1</sup> と比較すると母音の対応があわないけれども、ほかは声調もふくめて対応しているということをしめしている。

— 十分な証拠がないために、かりの形式としてしか再構できないときは、該当箇所を角括弧でくくっている。たとえば (70) の PBG \*p[ ]en<sup>1</sup> は、[ ] の部分を再構する根拠が十分ではないことをしめし、(77) の PBG \*[plu<sup>2</sup>-lap] は全体の再構形式が根拠にとぼし

10) 複合にさいし、接頭辞 mə- はあられなくなる。

11) この現象は、一音韻語には一声調しかあられもないというティワ語の状況 (Joseph & Burling 2006: 8-9) を想起させる。このことは、ボロ・ガロ諸語に語声調的傾向があることを示唆している。今後のさらなる研究がまつれる。

いことをしめす。

—PBGの閉鎖音について、有声か無声か決定できないばあいには、B, G, Dなどというように、大文字がもちいられる。ただし、ウスイ語などの証拠から有声性を決定できるばあいがある。

—PBGの\*s-と\*sh-の区別についても、ティワ語の例がなければ決定できないので、そのようなばあいには、Sとのみしるされている。

—PBGの流音についても、lかrかを決定できないばあいには、Rとのみしるされている。

—PBGの母音についても、具体的な音色を決定できないばあいには、Vとのみしるされている。

—PBGの形式は、J & Bでは\*がついていないけれども、本稿ではつけている。

—PBGの声調については、<sup>0</sup>は調値が指定されないことをしめす。<sup>1</sup>は、ティワ語が下降調、ボロ語とラバ語が低声調で実現することをしめす。<sup>2</sup>は、ティワ語、ボロ語、ラバ語は高声調で、ガロ語は声門閉鎖音をともなって実現することをしめす。<sup>3</sup>はティワ語、ボロ語、ガロ語、ラバ語のあいだで声調の実現形式が不規則であることをしめす。<sup>4</sup>は、声調の対応は規則的であるけれども、具体的な調値を決定する根拠が不足していることをしめす<sup>12)</sup>。なお、閉鎖音におわる閉音節では、ボロ・ガロ諸語のあいだで声調の対応がきわめて不規則であるので、J & Bでは調値を表記していない。

—J & Bでは、動詞は語根であることをしめすために、ティワ語、ボロ語、ガロ語、ラバ語では- (ハイフン) でおわっている。たとえば(7)のティワ語を例にとると、本来はwâl-と表記されている。これを本稿ではハイフンを省略し、wâlと表記している。

—J & Bに記載されている形式であっても、煩雑をさけるために省略したばあいがある。たとえば(6)のラバ語は、本来はphék-, (na-sèŋ)と表記されている。しかし本稿では、(na-sèŋ)は省略した。比較に直接はかかわらないとかがえられるからである。

- 本稿では、J & Bに筆者によるウスイ語の形式を追加したほか、Debbarma (2001, 2002)によるトリブラ語 (Kokborok: Kと略す)の形式もあげた。Debbarma (2001, 2002)による表記の注意点は以下のとおりである。

—母音のあとにあらわれるhは、高声調をあらわしていると推定される。

—chはイングランド語の表記にひきずられたものであって、有気音ではないと推定される。

—wは[ə]ないし[w]をあらわしていると推定される。

—Debbarma (2001)とDebbarma (2002)では、おなじ単語でも表記にちがいがみられることがある。そのようなばあい、より適当とおもわれる形式を採用した。

- トリブラ語の機能語についてPai (1976)から引用しているときは、そのように明記した。
- チベット・ビルマ祖語 (Proto-Tibeto-Burman: PTBと略す)の形式はMatisoff (2003)による。

### 3.2 対応例

Joseph & Burling (2006) にあげられた700語ほどのPBG形式にたいして、ウスイ語で対

12) ボロ・ガロ諸語では多音節語における声調のあらわれに、さまざまな制約がある。そして、<sup>4</sup>は多音節語にみられる傾向にある。ティワ語、ボロ語、ガロ語、ラバ語における声調の制約についてくわしくは、Joseph & Burling (2006: 8-10, 17-18, 21-22, 25-26, 99-106)を参照。



応するとおもわれる形式は 300 語ほど確認されている。

本稿では頭子音の対応例を中心にあげる。ただし、頭子音の対応例をあげるなかで、母音の対応例が網羅できるように配慮した。頭子音の例のなかであつかいきれなかった母音については、母音の節であらためて例をあげて論じた。しかし、すでに例があがっている母音については、対応の概略をのべるにとどめた。対応例の一覧表を子音と母音にわけて、3.3「対応のまとめ」にあげた。

なお、本稿ではウスイ語の対応例についてのみ、必要に応じて注をつけている。ティワ語、ボロ語、ガロ語、ラバ語にはそれぞれに特徴ある対応があるけれども、具体的な情報は Joseph & Burling (2006) で網羅的に説明されているので、本稿では必要に応じてふれるにとどめる。

### 3.2.1 頭子音

頭子音の対応については、ウスイ語もトリプラ語もほぼおなじ対応をみせる。だから、以下ではウスイ語の対応についてしかのべないけれども、トリプラ語の対応もほぼ同様である。

#### 3.2.1.1 閉鎖音

頭子音は、閉鎖音については、ボロ・ガロ諸語でかなり規則的に対応している。すなわち、一般的な傾向としては、ウスイ語、トリプラ語、ティワ語、ラバ語の四言語で無声無気閉鎖音であるものは、ボロ語とガロ語では無声無気閉鎖音で対応する。ウスイ語、トリプラ語、ティワ語、ラバ語の四言語で無声無気閉鎖音であるものは、ボロ語とガロ語では有声閉鎖音で対応する。ウスイ語、トリプラ語、ラバ語の三言語で有声閉鎖音であるものは、ボロ語とガロ語でも有声閉鎖音で対応するけれども、ティワ語では無声無気閉鎖音で対応する。

#### PBG \*ph, \*p, \*b

PBG \*ph-, \*p-, \*b- は、ウスイ語でも原則としては ph-, p-, b- でそれぞれ対応する。

(6) ‘intoxicated, drunk’ U pheĩ?, K phék, phe, T (nâŋ), B pé, G pek, R phék; PBG \*phek

(7) ‘return (vi)’ U pheràù, K phirok, T phíl, B pín, G pil?, R ph’(e)n; PBG \*phil<sup>2</sup>

注：ウスイ語の phe- にみられる母音 e は不規則な対応。ウスイ語の -ràù やトリプラ語の -rok はおそらくビルマ語の rok「到着する」と関係している。

(8) ‘snake’ U còbù, K chibuk, T cu-pú, B j(i)-b(ou), G chip-bu (<chu-bu), R (t)u-pú; PBG \*cu<sup>4</sup>-pu

注：PBG \*p- はウスイ語とトリプラ語では母音間で b- となって実現している。

(9) ‘break (vi)’ U bai, K bai, T pí, B báí, G bi?/be?, R bí; PBG \*bai<sup>2</sup>/bi<sup>2</sup>

#### PBG \*th, \*t, \*d

PBG \*th-, \*t-, \*d- は、ウスイ語でも原則としては th-, t- でそれぞれ対応する。PBG \*d- の対応例は、PBG \*D- の対応例として (30) で後述する。

(10) ‘three’ U thà, K tham, T thám, B tam, G git-tam, R thám, an-thám; PBG \*tham<sup>2</sup>

(11) ‘nest’ U mǎtho?, K bothop, T (pàs), B tòp ‘make nest’, G —, R thóp; PBG \*thop

(12) ‘blood’ U thoi, K thwih, T thí, B túí, G giŋ-si ‘blood from nose’, R sí; PBG \*thui<sup>2</sup>

(13) ‘die’ U thòi, K thwi, T thí, B tùí, G si, R si; PBG \*thui<sup>1</sup>

- (14) ‘bird’ U tau, K tok, tau, T tú, B dáo, G doʔ-o, R tó; PBG \*tao<sup>2</sup>  
 注：トリブラ語における -ok という反映形式についてくわしくは脚注 18 を参照。
- (15) ‘pot’ U tuʔ, K twk, T min-tú, may-tú, B dú, G dik, R túk; PBG \*tuuk
- (16) ‘sweet (vi)’ U toi, K twih, T tí, B dú, G chiʔ, R (sùm); PBG \*tui<sup>2</sup>
- (17) ‘water’ U tò, K twi, T tí, B dù, G chi, R ci-kà; PBG \*tui<sup>1</sup>

### PBG \*c, \*j, \*y

PBG \*c-, \*j-, \*y- は、ウスイ語では原則としては c-, j-, j- でそれぞれ対応する。

- (18) ‘tear (vt)’ U ciʔ, K chir, T cíl ‘cut, slice’, B (bi-si), G chit, R c(e)t, c(é); PBG \*cit
- (19) ‘ginger’ U haicɿ, K haiching (haching), T h’(a)-ciɿ, B hai-j(e)ɿ, G eʔ-chiɿ, R ciɿ-(kú);  
 PBG \*hai<sup>2</sup>-ciɿ  
 注：PBG の無声無気閉鎖音はボロ語では有声閉鎖音で対応するのが通則である。ただし、ボロ語には c- がないので、PBG \*c- は j- で対応するのが通則となる。
- (20) ‘pierce (vt)’ U joʔʃò, K —, T (phlá), B (su-plon), G jot, R jòt, jó; PBG \*jot  
 注：ウスイ語の -ʃò は内側への方向性をあらわす助動詞である。
- (21) ‘granary’ U màjǎ ‘hut in the swidden (jhum) field’, K mayam, T (tu-lí), B (ba-kri),  
 G jam, R jàm; PBG \*jam<sup>1</sup>
- (22) ‘hand’ U jauʔ, K yak, T yá, B a-kai, G jak, R cák; PBG \*yak  
 注：PBG \*y- は、ウスイ語では j- で対応するけれども、トリブラ語では y- で対応するようである。

### PBG \*kh, \*k, \*g

PBG \*kh-, \*k- は、ウスイ語でも原則としては kh-, k- でそれぞれ対応する。ウスイ語において g- があらわれるのは事実上借用語にかぎられ、PBG \*g- に対応する例は確認されない。

- (23) ‘burn (vi)’ U khǎ, K kham, T khâm, B kàm, G kam, R khàm; PBG \*kham<sup>1</sup>
- (24) ‘cotton’ U khù, K khul, T khúl, B kùn, G kil, R khwl (archaic); PBG \*khul<sup>1</sup>
- (25) ‘plant (vt)’ U kai, K kaih, T káy, B gái, G geʔ, R kái; PBG \*kai<sup>2</sup>
- (26) ‘thirsty (vi)’ U kaɿ, K kahng, T káɿ, B gáɿ, G gaɿʔ ‘sexually aroused’, R chi-kán;  
 PBG \*kaɿ<sup>2</sup>  
 注：J & B (2006: 143) は PBG \*gaɿ<sup>2</sup> を再構する。しかし、T k-, B g-, G g-, R k- の対応は、(25) にもみられるように、PBG \*k- となるのが通則である。

### PBG \*B, \*D, \*G

Joseph & Burling (2006: 52) によると、ティワ語、ボロ語、ガロ語、ラバ語のうち、ラバ語にだけ頭子音について有声、無声無気、無声有気という三項対立がみられる。だからラバ語の形式が確認されなければ、PBG の頭子音について有声性を決定できない。しかしながら、ウスイ語やトリブラ語にも頭子音の三項対立がある。だから、ラバ語の例が確認されないばあいでも、ウスイ語やトリブラ語の形式が PBG の頭子音を決定する根拠となりうる<sup>13)</sup>。(27)

13) ただし、次節「例外的な対応」で後述するように、ラバ語の有声閉鎖音がウスイ語やトリブラ語で無声閉鎖音で対応したり、逆に、ラバ語の無声閉鎖音がウスイ語やトリブラ語で有声閉鎖音で対応することがある。だから、ラバ語の例がないばあいに、ウスイ語やトリブラ語の根拠のみから

～(31)は、そのような例である。PBGの形式は筆者のかんがえにしたがって有声性を明示し、J & Bの形式は括弧にいった。

- (27) ‘four’ U bròì, K brwi, T —, B b(r)ùì, G bri, R —; PBG \*brui<sup>1</sup> (J & B \*Brui<sup>1</sup>)  
 注：(37)～(41)にしめすように、ラバ語が p- でウスイ語やトリブラ語が b- となるばあいには、語末に流音などがかわる。しかしこの例では語末には流音があらわれない。そこでラバ語の p- にウスイ語やトリブラ語が b- で対応している例とはかんがえず、ラバ語にも b- が想定されうる例とかんがえる。だから PBG に \*b- をたてることができる。
- (28) ‘touch (vt)’ U tàŋ ‘build, touch’, K tang, T (há-te), B dàŋ, G daŋ-tap, R (thè)ŋ; PBG \*taŋ<sup>1</sup> (J & B \*Daŋ<sup>1</sup>)  
 注：(34)のように、ラバ語の d- がウスイ語やトリブラ語では t- で対応する例がある。ただし、この例はラバ語が th- なので、ラバ語の形式自体が例外的であるとみて、PBG \*t- をたてることに問題はないとかんがえる。
- (29) ‘big’ U kəto, K kotor, T tór, B ge-der, dér, G dalʔ, R (cùŋ); PBG tVr<sup>2</sup> (J & B \*DVR<sup>2</sup>)  
 注：この例ではラバ語の形式自体が不規則なので、PBG \*t- をかんがえ、ウスイ語やトリブラ語では規則的に対応しているとかんがえるのが自然である。ただし、母音については不規則であり、PBGの形式を決定できない。
- (30) ‘six’ U douʔ, K dok, T —, B d(‘)o, G dok, R (sòì <A); PBG \*dok (J & B \*Dok)  
 注：この例ではラバ語の例がアッサム語からの借用語にいれかわっているために、本来の形式がわからない。そこで PBG \*d- をかんがえ、ウスイ語やトリブラ語では規則的に対応しているとかんがえるのが自然である。なおこの例は、J & Bにおいて PBG \*d- として対応しうるウスイ語の例で唯一のものである。
- (31) ‘skin’ U məkùt, K bukur, T kùr, B bi-gur, gùr ‘classifier for some flat things’, G bi-gil, R (khor-thóp, khor-tháp); PBG \*kur<sup>1</sup> (J & B \*Gur<sup>1</sup>)  
 注：(32)で後述するように、ウスイ語には本来語で g- にはじまる語がほぼないといえるので、PBG \*g- はウスイ語 k- で反映しているとかんがえることができる。逆にいえば、ウスイ語 k- には PBG \*k- または \*g- が対応しうるということである。ただしこの例では、ラバ語 kh- である。(28)で例外的なラバ語 th- に PBG \*t- を想定したことの平行性からいえば、例外的にラバ語 kh- であるものには PBG \*k- とかんがえてもよいとおもわれる。

### 例外的な対応

ラバ語の有声閉鎖音は、ウスイ語やトリブラ語でも有声閉鎖音で対応するのが通則である。しかしながら、無声閉鎖音で対応する例がときにみられる<sup>14)</sup>。以下に例をしめす。

- (32) ‘grasshopper’ U kuʔ, K kuk, T kú, B gu-ma, G g(u)k, R gúk; PBG \*guk  
 注：2.2.1でのべたように、ウスイ語では、形容詞接頭辞 gə- と借用語をのぞいては、

↗ PBGの頭子音の有声性を決定することは、厳密にはできない。本節であげる例は、それにもかかわらず、有声性が決定できると筆者がかんがえる例である。

14) このような対応を規則的に説明しようとすれば、PBGの有声閉鎖音に二系列をかんがえる必要がある。通常の有声閉鎖音にくわえて、たとえば声門閉鎖音をともなった \*ʔb-, \*ʔd-, \*ʔj-, \*ʔg- といった形式を想定するべきであるかもしれない。しかし現在のところ、共時的にそのような音声の実現をもつボロ・ガロ系の言語は確認されていない。

語頭に g- をもつ単語が確認されない。だから、PBG \*g- がウスイ語 k- で対応すること自体が、規則的な対応であるとかんがえることもできる。(33) も同様である。

- (33) ‘step, tread, trample’ U ka, K ka ‘wear shoes’, T ká-she, B gá, G ga?, R ga-da-grùt, ga-da-grú ‘trample violently’; PBG \*ga<sup>2</sup>

(34) ~ (36) の例は、ウスイ語とトリブラ語の無声閉鎖音が、ラバ語ではなぜ有声閉鎖音で対応するか、適当な説明ができない例である。

- (34) ‘new (vi)’ U kətà, K kwta, kta, T ko-tâl, B gur-dan, G git-dal <gur-dal, R (pí)-dan; PBG \*Gu<sup>0</sup>-dal<sup>4</sup>

注：声調については、ウスイ語が下降調であるので、PBG の声調は J & B では<sup>4</sup>になっているけれども、<sup>1</sup> とかんがえることができる。

- (35) ‘arrange neatly, pile up’ U ca?, K chap, T (shá-phe), B jàp, G jap, R j(è)p; PBG \*jap

- (36) ‘far (vi)’ U ha-ca, K hachal, T cáI, B ján, G (che)l?, R ján; PBG \*jal<sup>2</sup>/cal<sup>2</sup>

注：ウスイ語やトリブラ語にみられる ha という要素は、おそらく「土地」という意味である。

(37)~(40) にしめすのは、ラバ語の p- がウスイ語やトリブラ語では b- で対応する例である。これらの例では、基本的には PBG で語末に流音があらわれている点が特徴的である。ウスイ語では語末の流音は脱落するので、有声化がおこったとすれば、流音が脱落するまえの段階であったとかんがえなければならぬ。

- (37) ‘fly (vi)’ U bì, K bir, T pí-r(i), B bìr, G bil, R p`(u)r, p`(u); PBG \*pir<sup>1</sup>

- (38) ‘tree, cut tree, wood’ U bò ‘firewood’, K bol ‘firewood’, T —, B bòn ‘firewood’, G bol, R p`(a)n; PBG \*pol<sup>1</sup>

- (39) ‘wind (n)’ U nou?bà, K nobar, T pâr, B bàr, G bal-wa, R ram-pâr; PBG \*par<sup>1</sup>

- (40) ‘flower’ U khùbà, khù, K bubar, khum, T pâr, (khùm), B bi-bar, G bi-bal, R pâr; PBG \*pi<sup>0</sup>-par<sup>1</sup>

(41) にしめすように、PBG \*t- におわるときでも、ウスイ語で語頭閉鎖音が有声化している例がある。

- (41) ‘cross, go beyond’ U ba? (jump; tòi ba? ‘cross the river’), K —, T pâl, B bát, bár, G bat, R pát, pá; PBG \*pat

注：たとえば (18) にみられるように、PBG \*t- はウスイ語では-ʔ, トリブラ語では-r で対応するのが通則である。

(37)~(41) にあげてきたのは、いずれも PBG の両唇無声無気閉鎖音が有声化する例であった。ほかの閉鎖音では、このような現象はみられないだろうか。

PBG の無声有気閉鎖音については、(7) の PBG \*phil<sup>2</sup>, (24) の PBG \*khu<sup>1</sup> にみられるように、対応するウスイ語やトリブラ語で有声化がおこっていない。だから、無声有気閉鎖音では有声化しないとかんがえるべきである。

無声無気閉鎖音のなかでも、(31) にみられる PBG \*kur<sup>1</sup> でも、有声化がおこっていない。ただし、ウスイ語やトリブラ語では、本来語では語頭に g- がたたないために、\*k- が g- とはならないだけであるともかんがえられる。いずれにしても、PBG \*k- は、語末に流音があっても有声化しない。

PBG \*c-, \*t- については、(18) の PBG \*cit や (29) の PBG \*tVr<sup>2</sup> にみられるように、対応するウスイ語やトリブラ語で語頭音が有声化していない。

以上の観察から、PBG \*pVl, \*pVr, \*pVt となる語については、ウスイ語では bV, トリブラ語では bVl または bVr で対応するという規則があるとかんがえられる。ただし、語末の流音や歯閉鎖音と語頭の両唇無声無気閉鎖音の有声化とのあいだに、いかなる因果関係が存在するかはあきらかではない<sup>15)</sup>。

### 3.2.1.2 鼻音

鼻音の対応については、ほとんど例外がみられない。

#### PBG \*m, \*n

PBG \*m-, \*n- はウスイ語でもそれぞれ m-, n- で対応するのが通則である。

(42) ‘rice, paddy’ U mài, K mai, T mây, B mài ‘rice plant’, G m(i), me-roŋ ‘husked rice’, R mài; PBG \*mai<sup>1</sup>

(43) ‘ripe (vi)’ U mò, K mun, mon, T mún, B mùn, G min, R mùn ‘cooked’; PBG \*mun<sup>1</sup>

(44) ‘house’ U nou?, K nok, T nó, B nó, G nok, R nók; PBG \*nok

以下の二例にみられるように、PBG \*n- がウスイ語やトリブラ語、ティワ語では l- で対応することがある。しかし、理由はあきらかではない<sup>16)</sup>。

(45) ‘soft (vi)’ U kəlòì ‘soft (adj)’, K kwlwi, T (let), B (gu-rui), G nom?, R nòm ‘chew, soften’; PBG \*nom<sup>3</sup>

注：ウスイ語、トリブラ語、ボロ語に対する祖形としては PBG \*lui<sup>1</sup> を別語根として想定したほうがよいかもしれない。なお、PBG \*l- はボロ語では r- で対応する。

(46) ‘tired (vi)’ U leiŋ, K leng, T (l)éŋ, B (m)éŋ, G neŋ?, R néŋ; PBG \*neŋ<sup>2</sup>

### 3.2.1.3 摩擦音

摩擦音の対応についても、ほとんど例外はみられない。PBG \*phw-, \*bw- の対応については、ウスイ語での対応形式が摩擦音となるので、本節であつかう。

#### PBG \*s, \*sh, \*h

PBG \*s-, \*sh-, \*h- は、ウスイ語ではそれぞれ s-, s-, h- で対応する。

(47) ‘ask question’ U fuŋ, K swŋng, T sóŋ, B stúŋ, G siŋ?, R stúŋ; PBG \*stuŋ<sup>2</sup>

(48) ‘arrive’ U fou?, K sok-phai, T shó, B só, G sok, R sòk; PBG \*shok

注：PBG \*sh- の根拠となるのはティワ語のみである。ティワ語の sh- は [tsh] と発音されることもあるという (Joseph & Burling 2006: 5)。Joseph & Burling (2006:

15) (37) ‘fly’ には PTB \*pir (Matisoff 2003: 397), (40) ‘flower’ には PTB \*bar (Matisoff 2003: 392) が再構されている。ウスイ語やトリブラ語で語頭が b- で実現しているのは、ボロ・ガロ諸語内部での発展であるとかんがえられる。

16) 通言語的にみても、l と n が交替すること自体はありふれた現象である。トリブラ語のなかであっても、(59) にしめすように、l- と n- 両方の語形が記録されていることがある。ほかに、たとえば漢語の方言や幼児の言語にみられる (Matisoff 2006: 1, 脚注 3)。東北インドでは、たとえばチベット・ビルマ系のメイテイ語 (Meithei) において、音節末の -l と -n は自由に交替する (Chelliah 1997: 20)。インド・アリア語に目をむけると、東部方言に属する諸言語で、l と n の混同や交替がみられる。たとえばマイティリー語 (Maithili) やマガヒー語 (Magahi) では l と n が混同されるほか、ボージュプリー語 (Bhojpuri) では散発的に交替する (Jeffers 1976: 223)。パングラ語においては語頭でのみ l と n の交替がみられることがある (Chatterji 1926: 545-546)。

54-55) によれば、ティワ語の sh- は、周辺ではなされるモン・クメール系のカシ語 (Khasi) の影響であるかもしれないという。なお、ティワ語の sh- は、バングラデシュ・チッタゴン丘陵ではなされるチャック語 (Cak) の th- に対応している例が散見される。たとえば ‘arrive’ Cak thu?, T shò, PBG \*shok, ‘mortar’ Cak thuŋ, T shám, PBG \*sham<sup>2</sup>, PTB \*tsum などである。

- (49) ‘press (vt)’ U fe? ‘scrag’, K sehþ, T sh(^)ep, B sèp ‘narrow’, G sep, R sép; PBG \*shep  
 (50) ‘warm hands by fire’ U hàn ‘roast (vt)’, K hang, halang ‘to dry’, T hàn, B hàn, G aŋ, R hàn; PBG \*haŋ<sup>1</sup>  
 (51) ‘carry’ U hò, K hor, T hòr, B hòr, G ol, R (pài); PBG \*hor<sup>1</sup>

### PBG \*phw, \*bw

PBG \*phw-, \*bw- については、ウスイ語では、ウスイ語における円唇母音の前では h- で、それ以外の環境では w- で対応する。このような対応のしかたは、トリブラ語とティワ語でも共通する。(52) ~ (55) は h で対応する例である。

- (52) ‘fire’ U ho, K hohr, T hór, B ót, ór, G wa?-al, wal?, R bár; PBG \*bwar<sup>2</sup>

注：PBG \*-war はウスイ語では -o で対応するようである。

- (53) ‘night’ U hò, K hor, T hòr, B hòr, G wal, R phàr; PBG \*phwar<sup>1</sup>  
 (54) ‘stomach’ U bəhou?, K bohok, ok, bohau, T (pu-má, pum-pá), B u-(dui), G ok, R (bó-dom), bok-dom; PBG \*bwok  
 (55) ‘sharpen, whet (vt)’ U hu, K hul, T húl, B ‘(u)n, G wil?, R búin; PBG \*bwul<sup>2</sup>  
 (56) ~ (57) は w- で対応する例である。w- で対応する例は、事実上 PBG \*phwa または \*bwa となる例にかぎられる。

- (56) ‘rain (vi)’ U wà, K uatwi ‘rain (n)’, T —, B hà, G wa, R phà; PBG \*phwa<sup>1</sup>  
 (56) ‘bamboo’ U wa, K uah, T wa-thí, B ou-a, G wa?-a, wa?, R bá; PBG \*bwa<sup>2</sup>

#### 3.2.1.4 流音

流音の対応にも、ほとんど例外がみられない。

### PBG \*r, \*l

PBG \*r-, \*l- は、ウスイ語でもそれぞれ r-, l- で対応するのが通則である。

- (58) ‘dry (vi)’ U rā, K kwran(adj), T rán, (rân), B rán, G ran?, R rán, (ràn); PBG \*ran<sup>2</sup>  
 (59) ‘take (vt)’ U la, K la, na, T lá, B lá, G ra?, R rá; PBG \*la<sup>2</sup>

まれにはあるけれども、PBG \*l- がウスイ語では n- に対応する。用例をみるかぎりでは、PBG \*l- がウスイ語でも l- で対応するばあいと、n- で対応するばあいとは、相補分布している。すなわち、(60) にしめすように、ウスイ語の -uŋ と -aŋ は n- をもち、(61) にしめすように、ウスイ語の -eiŋ と -oŋ は l- をもつ。ただし、このような条件分岐には自然さがみられず、用例もかぎられているので、本当に相補分布しているといえるかどうかはわからない。

- (60) a. ‘drink’ PBG \*luŋ<sup>1</sup> → U nuŋ  
 b. ‘learn’ PBG \*shur<sup>4</sup>-luŋ → U ʃonùŋ  
 c. ‘take away’ PBG \*laŋ<sup>2</sup> → U naŋ 「去辞 (andative) の機能をもつ助動詞」  
 (61) a. ‘hawk’ PBG \*dao<sup>2</sup>-IVŋ → U taulèiŋ

## b. ‘stone’ PBG \*loŋ² → U ʃəloŋ

## PBG \*R

Joseph & Burling (2006: 60) によれば、ティワ語またはボロ語の例が確認されないばあい、PBG の流音が \*l なのか \*r なのかを決定することができない。しかし、そのようなばあいでも、ウスイ語やトリプラ語の例がわかれば、決定することができる。(62) はそのような例である。

(62) ‘boat’ U rùŋ, K rung, T —, B —, G riŋ, R rùŋ; PBG \*ruŋ¹ (J & B Ruŋ¹)

注：PBG \*l と \*r は、ガロ語とラバ語においては語頭では r、語末では -l というように、相補分布して対応する。

## 3.2.1.5 ゼロ子音

ウスイ語において母音はじまりの語は散見されるけれども、おおくのばあい、来源が不明である。ただし、PTB \*ŋ- に対応する語については、ほぼ例外なく、\*ŋ- が脱落して母音はじまりとなった形式で対応する。

## PBG \*∅, PTB \*ŋ

(63) ‘fish’ U a, K ah, T (ŋ)á, B ná, G naʔ-tok, naʔ, R ná; PBG \*na²; PTB \*ŋya (Matisoff 2003: 162)

注：PTB \*ŋ- は、ボロ・ガロ諸語で例外的に鼻音で対応するばあいであっても、ウスイ語やトリプラ語では例外とはならず、規則的に ∅- で対応する。

(64) ‘I’ U àŋ, K ang, T àŋ, B àŋ, G aŋ-a, aŋ, R àŋ; PBG \*aŋ¹; PTB \*ŋa ≧ \*ŋay (Matisoff 2003: 487)

注：PBG \*aŋ は、あるいは PTB \*ŋa が音位転換をおこした形式であるかもしれない。ただし、平行例が確認されていない。なお、A ≧ B は、A と B がおなじ語家族 (word-family) に属する変異形であることをしめす。

(65) ‘five’ U bà, K ba, T (phâs < A), B bà, G boŋ-a, (biŋ-a Modhupur dialect), R (pàs < A); PBG NC; PTB \*b-ŋa (Matisoff 2003: 166)

注：PBG NC は、ボロ語とガロ語の形式が同源形式ではないと J & B が判断していることをしめす。ウスイ語、トリプラ語、ボロ語では、PTB \*ŋ- は消失したけれども、PTB の接頭辞 \*b- は残存しているとかがえられる。

## 3.2.1.6 子音連続

本節でいうところのウスイ語における子音連続とは、(1) でしめした音節構造において、C<sub>1</sub>C<sub>2</sub> としてあらわれるものをさす。また、C<sub>0</sub>C<sub>1</sub> のうち、C<sub>1</sub> が流音であるものも、子音連続の一種とみなす。ただし、そのような形式をもつ語のおおくは、来源が不明である。本節では PBG \*Pr-, \*Kr-, \*s/hV-l- を中心にあつかう。

## PBG \*Pr/Pl

同源形式が確認されるかぎりでは、PBG \*pr- はウスイ語でもトリプラ語でも p- で対応するのが通則である。(66) ~ (68) に例をあげる。

(66) ‘buy’ U pài, K pai, T pré, B bàì, G bre, R pri; PBG \*prai¹

- (67) 'goat (n)' U pù, K pun, T prún, B —, G —, R prún; PBG \*prun<sup>2</sup>

注：ウスイ語とトリブラ語の声調は、PBG に対応しない。

- (68) 'salty (vi)' U paʔ, K pap, T —, B (p)àp, G brap, R pràp; PBG \*prap

- (69) にしめすように、マルマ語 pr- がウスイ語 p- で借用されているものもある。

- (69) 'opposite (n)' U apàij ← Marma əpraɪj

注：マルマ語の -aij はビルマ文語（以下 WB と略す）では -am または -an で対応する（藤原 2003: 269）。WB -am, -an はそれぞれ PTB \*-am, \*-an で対応し、PBG \*-am, \*-an でも対応する。PBG \*-am, \*-an は、3.3.2.2 の表 9 でしめすように、ウスイ語では -ã で対応する。だから、ウスイ語の -aij はマルマ語の -aij が借用された結果とかがえる。

(70) にしめす一例しか確認されていないけれども、ウスイ語では -l- がなく、トリブラ語では保持されているものがある。

- (70) 'straight (vi)' Upèij, K kepleng, T plèij, phlèij'(vt)', Bbèij, ge-beij, G dim-breij, R prèij; PBG \*p[l]ej<sup>1</sup>

注：トリブラ語の例も考慮すれば、正式に -l- を再構してもよいとおもわれる。

(71) にしめすのは、ウスイ語やトリブラ語の br- に対して確認される唯一の確実な同源形式である。

- (71) 'four' U bròi, K brwi, T —, B b(r)ùii, G bri, R —; PBG \*brui<sup>1</sup> (J & B Brui<sup>1</sup>)

注：PTB \*b-ləy (Matisoff 2003: 192) がしめすように、語頭の b- は本来的には接頭辞であると推定される。PTB \*-l- が PBG ではなぜ \*-r- で対応しているかはよくわからない。

ウスイ語には pr-, phr-, br- などが比較的好く確認されるけれども、同源形式はわからないことがおおい。

- (72) 'become big' U praŋ

- (73) 'shade (n)' U ʃãpɪ

- (74) 'teak tree (n)' U preiŋ

- (75) 'tadpole (n)' U jěpru

- (76) 'teach' U phrùŋ < ph- 「使役接頭辞」 + rùŋ 「知る」

- (77) 'lightning, thunder' U phrà, K —, T (p) '(i)-la( ), B (mu)-pla(m), G (i)lʔ-(e)p, R phur-(l)áp; PBG \*[phu<sup>2</sup>-lap]

注：この対応例は、いろいろな面で不規則である。

- (78) 'man (n)' U brou? cf. K borok

## PBG \*Kr

一般に PBG \*Kr- はウスイ語でも kr- で対応している<sup>17)</sup>。

- (79) 'bone' U məkreiŋ, K bekreŋ, T kréij, B be-geij, G greij, R kéij-juŋ; PBG \*kreij<sup>3</sup>

注：PBG の声調は、ウスイ語、ティワ語、ラバ語の証拠から高声調 (2) としてよい

17) PBG \*-r- のトリブラ語における反映のしかたは、古代ビルマ語 (OB と略す) -l- のふるまいを想起させる。すなわち、PBG \*pr- がウスイ語 p- で、PBG \*kr- がウスイ語 kr- で対応するという現象は、OB kl- が WB ky- で、OB pl- が WB pr- で対応するという現象と比較すると、p- と k- のあられが逆転しているほかは、非常によくにている。



とおもわれる。トリプラ語では、高声調であっても -h が表記されない例は散見される。

- (80) ‘horn (n)’ U məkròŋ, K bokhorang, T kr(‘)oŋ, B gòŋ, G groŋ, R kròŋ; PBG \*kroŋ<sup>1</sup>  
 注：トリプラ語の kh- はおそらく誤植である。
- (81) ‘wing, feather’ U məkràŋ, K kraig, bwkraig, T kr(‘)aŋ, B gàŋ, G graŋ, R kr(‘)eŋ;  
 PBG \*kraŋ<sup>1</sup>
- (82) ‘right-hand side’ U jauʔgrà, K yagra, T ya(k)-rá, B a(k)-(d)a, G jak-ra, R (mai-sá-laŋ);  
 PBG \*yak-ra

ただし、以下の二例では PBG \*kr- がウスイ語 k- で対応している。分岐の条件は不明である。

- (83) ‘cry’ U kaʔ, K kap, T krá(‘), B gàp, G grap, R (kh)(‘)àp; PBG \*Grap
- (84) ‘drum’ U khàŋ, K kham, T khr(‘)am, B kàm, G kram, R khàm; PBG \*khram<sup>1</sup>  
 注：ウスイ語の -aiŋ は通則にあわない対応である。記録がまちがっている可能性もある。

PBG として再構される形式よりも、PTB の形式とよく一致する例が一例みられる。

- (85) ‘fear (vi)’ U krì, K kiri, T khên, (B gî), G ken an-skit ‘quail, shudder’, R (kir, kiri);  
 PBG \*khen<sup>1</sup>; PTB \*kri-t (Benedict 1972: #416, Matisoff 2003: 462)  
 注：PBG \*khen<sup>1</sup> はティワ語とガロ語にたいしては適当である。しかし、ウスイ語、トリプラ語、ボロ語、ラバ語の形式は、PTB \*kri-t のほうによく対応する。PBG \*kV-ri という形式を再構しうる。

## PBG \*s/hV-l

PBG \*s/hV-l は、ウスイ語では ʃəl- で対応する。

- (86) ‘change, exchange’ U ʃəlai, K slaima, T —, B stulai, G sre, R (t)rái; PBG \*S[tu<sup>3</sup>]-lai  
 注：トリプラ語の -ma は動詞を名詞化する接辞と推定される。
- (87) ‘lick (vt)’ U ʃəlauʔ, K swlak, T shé-lai, B s(tu)-la, G sr(a)k, R se-(l)ék; PBG \*[she<sup>4</sup>-lV]k
- (88) ‘tongue’ U məʃəlài, K bwslai, T shí-l(i), B sa-lai, G sre, (si-ri Modhupur dialect), R (khú)-(t)ai; PBG \*shV<sup>1</sup>-lai

## 3.2.2 母音

母音については、ウスイ語とトリプラ語で対応に差がある例が散見される。ウスイ語の対応を中心にのべるけれども、ウスイ語の対応とはことなるばあいには、トリプラ語にも言及する。

### 3.2.2.1 開音節

#### 3.2.2.1.1 単母音

PBG \*a は開音節の母音としてもっともよく確認される形式であり、ウスイ語でも -a で対応する。具体例は (33), (56), (57), (59), (63), (65), (82) などにみられるので、ここでは再掲しない。

PBG \*u も比較的良好に確認され、ウスイ語でもトリプラ語でも通常は -u で対応する。たとえば (8) にあげた例が該当する。ただし、PBG \*u については、ウスイ語が -u であっても、トリプラ語では -uk で対応する例が散見される。この現象は、PBG の第 2 声調<sup>(2)</sup> がガロ語では声門閉鎖音で対応している現象を想起させる。しかしながら、トリプラ語においては、PBG の第 1 声調でも第 2 声調でも、\*u が -uk で対応する例がみられる。(89) と (90) が該

当例である。

(89) ‘deep (vi)’ U *thu*, K *kuthuk*, T *thú*, B *t’(ou)*, G *tu?*, R *thú*; PBG \**thu*<sup>2</sup>

注：トリブラ語の *ku-* は形容詞接頭辞である。Matisoff (2003: 359) は PTB \**tu:k* ‘deep/thick’ を再構しており、トリブラ語の形式は、そちらと関係があるかもしれない。ただし、おなじ語根について、ガロ語では *dik* が対応するとされている点が不規則である。

(90) ‘tall, high (vi)’ U *cù*, K *chuk*, T *cù*, B *j’(ou)*, G *chu*, R *cù*; PBG \**cu*<sup>1</sup>

PBG \**-i*, \**-e*, \**-o*, \**-u* は例が非常にすくない。対応例をみるかぎりでは、ウスイ語ではそれぞれ *-i*, *-e*, *-o*, *-oi* で対応する。(91) ~ (94) にあげるのは、それぞれの母音についてウスイ語の対応形式が確認されるほとんど唯一の例である。

(91) ‘dirt, feces’ U *khi*, K *khi*, T *kh’(e)*, B *kí*, G *ki?-i*, *ki?*, R (j)*í*; PBG \**khi*<sup>2</sup>

(92) ‘emphatic suffix’ U =*jè*, K *sɛ* (Pai 1976: 81), T *se*, B *s(u)*, G *s(a)* ‘only’, R *san*, *se*; PBG \**se*<sup>0</sup>

(93) ‘emerge, go through’ U *pò*, K *—*, T *pró*, B *—*, G (p)*r(u)*, R *pròt*, *prò*; PBG \**pr[o]*<sup>4</sup>

注：(66) ~ (68) でしめたように、PBG \**pr-* はウスイ語では *p-* で対応する。声調については、ティワ語がウスイ語やラバ語とあいられないので、決定できない。

(94) ‘penis’ U *blò*, K *bwlwi*, *lwi*, T (tu-*táy*), B *lu-dui*, G *ri-gon*, R *r’(u)-khu*; PBG \**lu*<sup>3</sup>; PTB \**m-ley*※\**m-li* (Matisoff 2003: 219)

注：この例は、PBG \**-u* にたいしてウスイ語形式が確認される唯一の例である。ウスイ語の形式は、PBG よりは PTB によりちかい。

### 3.2.2.1.2 二重母音

PBG \**-ai* は、ウスイ語でも *-ai* で対応する。対応例は (9), (25), (42), (66), (86), (88) など、おおくみられる。

PBG \**-ao* は、ウスイ語では *-au*, トリブラ語では *-ok* で対応するのが通則である。トリブラ語の語末の *-k* は、(14) にみられるように、トリブラ語に特有の反映形式である<sup>18)</sup>。

PBG \**-ui* は、ウスイ語では *-oi* で対応する。対応例は (12), (13), (16), (17), (27), (71) など、おおくみられる。トリブラ語における *-wi* [*ui*] という対応は、PBG の形式をよりよく反映している。

### 3.2.2.2 閉音節

一般に、閉音節での音韻対応は規則的である。ただし、個々の対応例は、かずとしてはかぎられている。

#### 3.2.2.2.1 閉鎖音

PBG \**-ap*, \**-at*, \**-ak* は、ウスイ語ではそれぞれ *-a?*, *-a?*, *-au?* で対応するけれども、トリブラ語では母音も語末子音もそのまま保持されている。具体例としては、PBG \**-ap* は (35), (68),

18) (14) ‘bird’ については PTB \**daw* あるいは \**dow* (Matisoff 2003: 226) が再構されている。その点からみても、トリブラ語にみられる *-ok* は不規則な形式である。ただし、おなじ韻尾をもつ語について、上古漢語 (Old Chinese) では \**-og* が再構される例が散見される (Matisoff 2003: 227-228)。トリブラ語の形式のほうが、むしろ古形を保持している可能性もある。

(83), PBG \*-at は (41), PBG \*-ak は (22) にみられる。このほかにも、対応例がおおく確認される。

しかしながら、ほかの対応例については、3.3.2.2の表9にしめした例くらいしか確認されない。一般にウスイ語では語末閉鎖音は声門閉鎖音におきかわり、PBG \*-ek が -ei?, PBG \*-ok が -au? で対応するほかは、母音は保持されている。トリブラ語では、語末閉鎖音も先行する母音も保持される。

PBG \*-et の例は Joseph & Burling (2006) 全体でも三例しかあがっておらず、ウスイ語やトリブラ語で対応する例が見つかるものはない<sup>19)</sup>。PBG \*-ik については、(95) にあげる一例が確認されるのみである。

(95) 'wife' U biʃi?, K hik, T (mâr-ki), B (hin-jao), G meʔ-chik 'woman', R mí-cik 'wife';  
PBG \*mV<sup>2</sup>-cik

注：PBG \*ci- がウスイ語で ʃi-, トリブラ語で hi- で対応するという現象自体が不規則であるから、同源形式というのかどうかには疑問がのこる。

### 3.2.2.2.2 鼻音

PBG \*-Vm, \*-Vn, \*-Vŋ については、トリブラ語では基本的にそのまま保持される。しかし、ウスイ語では一般に、PBG \*-Vm と \*-Vn は -Ṽ で、\*-Vŋ は -Vŋ で対応する傾向にある。

PBG \*-am となる例は、3.3.2.2の表9にしめした例をはじめ、おおく確認され、ウスイ語では -ã で対応する。しかし、ほかの PBG \*-Vm の例はかぞえるほどしか確認されない。PBG \*-im は Joseph & Burling (2006) にも確認されない。PBG \*-em<sup>20)</sup> と PBG \*-um はそれぞれ一例ずつしか Joseph & Burling (2006) に確認されず、そのうち \*-um に対してのみウスイ語の対応例が見つかり、-ũ で対応している。

(96) 'build a fence' U dũ, K dum, T túm, B dúm, (dúti), G dimʔ, R (thùk); PBG \*dum<sup>2</sup> (J & B Dum<sup>2</sup>)

Joseph & Burling (2006) には PBG \*-om が五例あがっている。そのうちウスイ語の対応例が見つかるのは、(97) の一例だけで、-õ で対応している。

(97) 'lie in wait' U cõ 'ambush', K ー, T (sh)ô-me, B jòm, G chom-bu, R còm; PBG \*com<sup>1</sup>  
対応例をみるかぎりでは、PBG \*-um は、ウスイ語では -õ で対応する。

(98) 'salt' U ʃõ, K sohm, T sóm, B (soŋ-kri), G sim (Modhupur dialect), R sùm (Mayturi dialect); PBG \*sum<sup>3</sup>

注：ウスイ語、トリブラ語、ティワ語の声調を基準とすれば、PBG の声調は高声調 (2) となる。しかしガロ語やラバ語を基準とすれば低声調 (1) となる。どちらがより妥当であるかは決定できない。

PBG \*-an と \*-un は、3.3.2.2の表9にしめした例をはじめ、比較的よく確認され、ウスイ語ではそれぞれ -ã, -ũ で対応する。\*-in は Joseph & Burling (2006) にもあげられていない。PBG \*-en は (85) にしめした一例があるのみであるけれども、ウスイ語の形式は同源形式とはいえない。(99) にしめすのは、PBG \*-on に対応する唯一の例で、ウスイ語では -õ で対応

19) Matisoff (2003: 375) は「チベット文語、ルシャイ語、ボド・ガロ諸語で \*-et に対応する例はまだ確認されていない」とのべている。

20) Matisoff (2003) 全体でも PTB \*-em は二例しかあがっていないので、ボロ・ガロ諸語には対応例がそもそもないのかもしれない。

している。

(99) ‘put down’ U tồ, K ton, T tòn, B d` (u)n, G don, R t` (a)n; PBG \*ton<sup>1</sup>

PBG \*-unについては, (100) がウスイ語と対応しうる唯一の形式であり, -ũで対応している。

(100) ‘wear (as shawl or shirt)’ U cù, K chum, T cùn, B jù(m), G chin, R c` (o)n; PBG \*cun<sup>1</sup>

注: ウスイ語の語末は PBG \*-n に対応するというよりは, トリブラ語やボロ語とともに, PBG \*-m に対応するとかんがえるほうが適当である。すなわち, この例が PBG \*-un の対応例といえる可能性はひくい。

PBG \*-Vŋ は, 3.3.2.2 の表9 にしめたように, すべての母音に対して例がよく確認されている。PBG \*-ej が -eiŋ で対応するほかは, PBG \*-Vŋ はウスイ語でも -Vŋ で対応する。

### 3.2.2.2.3 流音

PBG \*-Vr や PBG \*-Vl は例がすくない。ウスイ語においては, 語末の流音は消失し, いずれも -V で対応するのが通則である。ただし, トリブラ語ではどちらの流音も語末で保持される。PBG \*-ar と PTB \*-or には適当な例が確認される。PBG \*-ir には (37) にしめた一例しか確認されない。PBG \*-er には適当な対応例がない。PBG \*-ur は, ほかに子音でおわる平行例から推測される -u ではなく, (31) にしめたように, -u で実現している。ただし, それが通則といえるかどうかには疑問がのこる。

PBG \*-ur は, ウスイ語では -o で対応する。(101) は唯一の確実な対応例である。

(101) ‘iron’ U fò, K sor, T sôr, B sùr, G sil, R sùr; PBG \*sur<sup>1</sup>

PBG \*-uɕ は, ウスイ語では -uɕ または -oɕ で対応する。しかし, 母音の音色をきめる条件はあきらかではない。

PBG \*-ul は, ウスイ語では -u で対応する。(55) のみが適当な対応例である。

### 3.2.3 声調

ボロ・ガロ諸語内部における声調対応は, 一音節語については, かなり規則的で例外がすくない。

一般にウスイ語の中平調(無印)はトリブラ語の高声調(-h), ティワ語の高声調(ˊ), ボロ語の高声調(ˊ), ラバ語の高声調(ˊ)で対応する。ウスイ語の下降調(ˋ)はトリブラ語の低声調(無印), ティワ語の下降調(ˋ), ラバ語の低声調(無印)で対応する。

最小対語の例である(12)と(13)を以下に再掲する。

(12) ‘blood’ U thoi, K thwih, T thí, B tui, G giŋ-si ‘blood from nose’, R sí; PBG \*thui<sup>2</sup>

注: PBG の高声調(ˊ)はガロ語では声門閉鎖音で対応するのが通則である。ただし, 第二音節では声門閉鎖音があらわれない (Joseph & Burling 2006: 21)。ガロ語において声門閉鎖音の有無で最小対語をなす例は, たとえば(16) ‘sweet’ chi? vs. (17) ‘water’ chi などにみられる。

(13) ‘die’ U thòi, K thwi, T thí, B tui, G si, R si; PBG \*thui<sup>1</sup>

### 3.3 対応のまとめ

本節で列挙してきた対応を表にまとめ, 以下にあげる。対応がわからないものについては?のみをつけた。たとえば PBG \*ut に対応するウスイ語やトリブラ語の形式は確認されないの?で, ?にしている。他方, 対応例が確認されるけれども, 規則的なものかどうかかわからないも

のや、対応例が確認されないけれども、類例から判断して対応音が推測されるものには、対応音のあとに?をつけた。たとえばPBG \*ip にたいするウスイ語の \*i? というのは、もしも対応例があるならこうなることが予想されるというものである。他方、PBG \*u にたいするウスイ語の oi? は、対応例はそうなっているけれども、規則的といえるかどうかはわからないものである。また、ほかに推測される対応を括弧にいれてしめしたばあいもある。

### 3.3.1 頭子音

表 6. ボロ・ガロ諸語とウスイ語の頭子音

PBG	Tiwa	Boro	Garó	Rabha	Kokborok	Usoi	No.
*ph	ph	p	p	ph	ph	ph	(6), (7)
*p	p	b	b	p	p/b	p/b	(8), (66)
*b	p	b	b	b	b	b	(9), (27), (71)
*th	th	t	t	th	th	th	(10), (11), (89)
*thui	thi	tui	si	si	thwi	thoi	(12), (13)
*t	t	d	d	t	t	t	(14), (15), (28), (29), (99)
*tui	ti	dui	chi	ci	twi	toi	(16), (17)
*d	t	d	d	d	d/t	d/t	(30), (34), (96)
*c	c	j	ch	c	ch	c	(18), (19), (90), (97), (100)
*j	(c)	(j)	j	j	y/j	j/c/y	(20), (21), (35), (36)
*y	y	∅	j	c	y	j	(22)
*kh	kh	k	k	kh	kh	kh	(23), (24), (91)
*k	k	g	g	k	k	k	(25), (26), (31)
*g	k	g	g	g	k	k	(32), (33)
*m	m	m	m	m	m	m	(42), (43)
*n	n	n	n	n	n	n	(44)
*n	l	n	n	n	l	l	(45), (46)
*s	s	s	s	s	s	ʃ	(47), (92), (98), (101)
*sh	sh	s	s	s	s	ʃ	(48), (49)
*h	h	h	∅	h	h	h	(19), (50), (51)
*bw	w/(h)	∅	w	b	ua/h	w/h	(52), (54), (55), (57)
*phw	h	h	w	ph	ua/h	w/h	(53), (56)
*r	r	r	r	r	r	r	(58), (62)
*l	l	l	r	r	l	l	(59), (61)
*l	l	l	r	r	n	n	(60)
*∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	(64), (65)

表 7. ボロ・ガロ諸語とウスイ語の頭子音連続

PBG	Tiwa	Boro	Garó	Rabha	Kokborok	Usoi	No.
*Pr	Pr	P	Pr	Pr	P	P	(66), (67), (68), (93)
*Kr	Kr	K	Kr	Kr	Kr	Kr	(79), (80), (81), (82)
*SVl	SVl	sVl	sr	?	sVl	sVl	(86), (87), (88)

## 3.3.2. 母音

## 3.3.2.1 開音節

表 8. ボロ・ガロ諸語とウスイ語の母音（開音節）

PBG	Tiwa	Boro	Garó	Rabha	Kokborok	Usoi	No.
*i	i	i	i	i	i	i	(91)
*e	e	e	e	e	e	e	(92)
*a	a	a	a	a	a	a	(33), (56), (57), (59), (63), (65), (82)
*o	o	o	o	o	o	o	(93)
*u	u	u	u	u	u	u	(8)
*u	u	u	u	u	uk	u	(89), (90)
*uu	u/(o)	uu	i	uu	wi?	oi?	(94)?
*ai	ay/(i)	ai	e	ai/(i)	ai	ai	(9), (25), (42), (66), (86), (88)
*ao	ay/(u)	ao/(eo)	o	o/(ao)	au/ok	au	(14)
*ui	i	ui	i	i	wi	oi	(12), (13), (16), (17), (27), (71)

## 3.3.2.2 閉音節

表 9. ボロ・ガロ諸語とウスイ語の母音（閉音節）

PBG	Tiwa	Boro	Garó	Rabha	Kokborok	Usoi	No.
*ip	ip	ip	ip	ip?	ip?	i?	J & B 2006: 123, 148
*ep	ep	ep	ep	ep	ep	e?	(49)
*ap	ap	ap	ap	ap	ap	a?	(35), (68), (83)
*op	op	op	op	op	op	o?	(11)
*up	—	—	—	—	—	—	確認されない
*up	—	—	—	—	—	—	確認されない
*it	il	it/ir	it	it?/i?	ir	i?	(18)
*et	el	et/er	et	et/e	er?	e??	J & B 2006: 119, 123
*at	al	at/ar	at	at/a	ar	a?	(41)
*ot	ol?	ot/or	ot	ot/o	or?	o?	(20)
*ut	ul	ut/ur	it	ut?/u?	ur?	u??	J & B 2006: 117, 123
*ut	ul?/ol?	ut?/ur	it	ut/ur	?	?	J & B 2006: 136
*ik	i	i?	ik	ik	ik?	i??	(95)?
*ek	e	e	ek	ek	ek	ei?	(6)
*ak	a	a	ak	ak	ak	au?	(22), (82)
*ok	o	o	ok	ok	ok	ou?	(30), (44), (48), (54)
*uk	u	u	ik?	uk?	uk	u?	(32)
*uk	u	uu	ik	uk	wk	u?	(15)
*im	—	—	—	—	—	—	確認されない
*em	?	?	em	em	?	?	J & B 2006: 127
*am	am	am	am	am	am	ã	(10), (21), (23), (84)
*om	om	om	om	om	om?	õ	(97)
*um	um	um	im	um?	um	ũ	(96)
*um	um/(om)	um	im	um	um/om?	õ?	(98)?

PBG	Tiwa	Boro	Garó	Rabha	Kokborok	Usoi	No.
*in	—	—	—	—	—	—	確認されない
*en	en	?	en	en	?	?	(85)
*an	an	an	an	an	an	ã	(58)
*on	on	on	on	on	on	õ	(99)
*un	un	un	in	un	un?	ũ	(100)?
*uun	un	uun	in	uun	un/on	ũ/õ	(43), (67)
*ij	ij	ij	ij	ij	ing	ij	(19)
*ej	ej	ej	ej	ej	eng	ej	(46), (70), (79)
*aj	aj	aj	aj	aj	ang	aj	(26), (28), (50), (64), (81)
*oj	oj	oj	oj	oj	ong	oj	(80)
*uj	uj	uj	ij	uj	ung	uj	(62)
*uuj	uuj/(oj)	uuj	ij	uuj	wng/(ong?)	uuj/(oj?)	(47)
*ir	ir	ir	il	ir	ir	i	(37)
*er	er	er	el	er	er?	e?	J & B 2006: 115, 131
*ar	ar	ar	al	ar	ar	a	(39), (40)
*or	or	or	ol	or?	or	o	(51)
*ur	ur	ur	ir	ur	ur	u	(31)
*uur	ur/(or)	uur	ir	uur	(ur?)/or	(u?)/o	(101)
*il	il	in	il	in	il/i?	i/e?	(7)
*el	—	—	—	—	—	—	確認されない
*al	al	an	al	an	al/a	a	(34), (36)
*ol	ol	on	ol	on	ol	o	(38)
*ul	ul	un	il	un?/tul	ul	u?/u	(24)?
*tul	ul/(ol)	tul	il	tul	ul	u	(55)

### 3.3.3 声調

表 10. ボロ・ガロ諸語とウスイ語の声調

PBG	Tiwa	Boro	Garó	Rabha	Kokborok	Usoi
*0	toneless	toneless	∅	toneless	toneless	toneless/falling
*1	^	`	∅	`	not marked	falling (˘)
*2	´	´	?	´	-h	level

## 4. おわりに

以上、本稿ではウスイ語の音体系を略述し、Joseph & Burling (2006) にしめされるボロ・ガロ諸語と比較対照した。その結果、ウスイ語は頭子音については、祖語に推定される無声無気・無声有気・有声無気の三項対立や二種類の流音と声調を保持していることがわかった。他方、語末音については、閉鎖音は声門閉鎖音におきかわり、鼻子音は軟口蓋鼻音をのぞいては、先行する母音を鼻母音にして消失し、流音はすべて消失し、語末に本来流音があったとき \*p- が b- になるといった改新がみられることもわかった。本来語では g- にはじまる語がほぼないことも確認された。

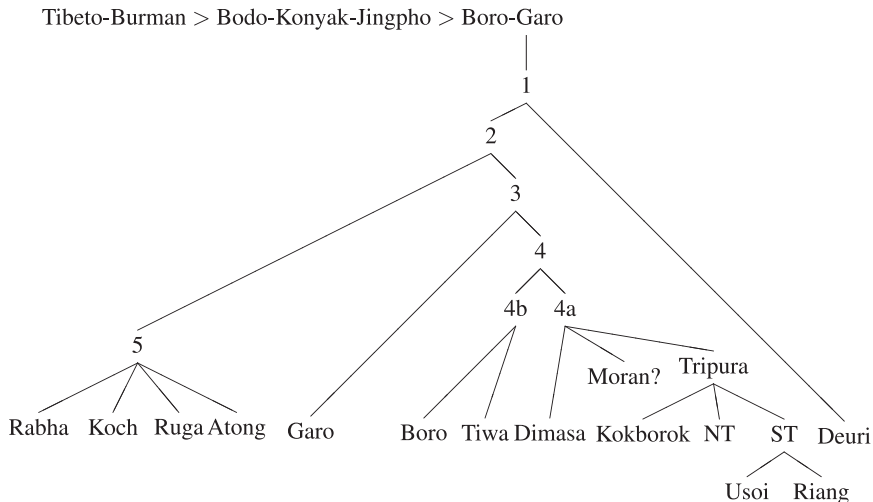
ウスイ語とトリプラ語はほとんどおなじような音対応をしめすけれども、トリプラ語では、ウスイ語と比較すると、PBGの語末音がよく保持されている。すなわち、語末音について、閉鎖音はPBG \**-t*について*r*に変化するものがあることをのぞけば保持され、鼻子音や流音はすべて保持される。また、トリプラ語の母音については、PBG \**-ao*に対応するものは基本的には*-ok*であられ、PBG \**-u*に対応するものの一部に*-uk*であられるものがある点が、特別である。

本稿では比較の対象をJoseph & Burling (2006)に限定したけれども、Jacquesson (2005)にはデウリ語、Jacquesson (2008b)にはディマーサ語の基礎語彙がそれぞれ1000語以上確認される。今後はそれらの資料も視野にいれ、ボロ・ガロ諸語における音対応全体をより精密に考察していく必要がある。

## 附録

以下にあげるのはBurling (2009)によるボロ・ガロ諸語の系統樹に、ウスイ語やリエン語を追加したものである。おもな変更点は以下のとおりである。

- 全体の上位区分をTibeto-Burman > Bodo-Konyak-Jingpho > Boro-Garoとした。
- 分岐点4の下位分岐として4aと4bを導入した。
- 原文では破線であるMoranの分岐を印刷の都合で実線とした。
- KokborokとしてあげられていたものをTripuraとした。
- Tripuraの下位分類としてKokborok, Northern Tripura (NTと略す), Southern Tripura (STと略す)をあげた。
- Tripura-Southern Tripura (ST)の下位分類としてUsoid, Riangをあげた。



Burling (2009)による分類の要点は、以下のようにまとめられる。数字は上図の分岐点に対応する。

### 1. Deuri vs. everything else

- デウリ語は、ほかのどのボロ・ガロ諸語よりも、語末子音を消失している。



- ・ デウリ語は、ほかのボロ・ガロ諸語ではあまりみられない鼻母音をもつ。
  - ・ デウリ語には、中舌母音 (ə, i, u の類) がない。
2. Rabha-Koch-Atong-Ruga vs. Garo-Boro-Tiwa-Dimasa-Kokborok-Moran
- ・ ラバ語では、時制接辞に先行する非使役派生接辞が、ガロ語やボロ語などと比較して非常にすくない。
  - ・ ラバ語、コチ語、アトン語、ルガ語には形容詞接頭辞 gV- がない。この接頭辞はガロ語では化石化しているけれども、ボロ語、ティワ語、ディマーサ語、トリブラ語ではよくもちいられる。
  - ・ ガロ語やボロ語などによくみられる接頭辞 bi- がラバ語にはない。
  - ・ ガロ語、ボロ語、ティワ語、ディマーサ語、トリブラ語で共通する語彙がおおくみられる一方で、それらに意味的に対応する語彙がラバ語、コチ語、ルガ語、アトン語ではことなっている。
3. Garo vs. Boro-Tiwa-Dimasa-Kokborok
- ・ ガロ語では声調が弁別的ではない。
  - ・ ガロ語をのぞいては、語末子音に脱落するものが散見される。
  - ・ 使役接頭辞がガロ語にはほとんどみられない。
4. Tiwa-Boro vs. Dimasa-Kokborok<sup>21)</sup>
- ・ ティワ語とボロ語では語末の -k が消失している<sup>22)</sup>。
  - ・ ディマーサ語とトリブラ語では語末の -t が消失している<sup>23)</sup>。
  - ・ モラン語はおそらく死語であるけれども、かぎられた語彙資料から判断するだけでも、4以降のどこかで分岐していることはまちがいない<sup>24)</sup>。ただし、具体的にどこに位置するかはきめられない。
5. Rabha-Koch-Atong-Ruga
- ・ 資料が十分ではないので、さらに分類することはできない。

## 参 考 文 献

- Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bhattacharya, Pramod Chandra. 1977. *A Descriptive Analysis of the Boro Language*. Gauhati: Department of Publication, Gauhati University.
- Burling, Robbins. 1959. "Proto-Bodo." *Language*, 35(3): 433-453.
- . 1961. *A Garo Grammar*. Poona: Deccan College Postgraduate & Research Institute.
- . 2004. *The Language of the Modhupur Mandi (Garo)*. Vol. I Grammar. New Delhi: Bibliophile South Asia.
- . 2009. "The Boro-Garo Stammbaum." Paper presented at NEILS #4, 15-17 January 2009. North-Eastern Hill University, Shillong, Meghalaya, India.

21) 以下にあげられる特徴のほかに、PBG \*phw/\*bw- の対応によって、下位分類することもできるようにおもえる。すなわち、(52) ~ (56) にしめたように、ウスイ語、トリブラ語、ティワ語は、それぞれの言語の円唇母音のまえではそれらが h- で対応し、それ以外の環境では w- で対応する。他方、Jacquesson (2008b) にあげられる例をみると、ディマーサ語ではすべて原則的には h- で対応する。音対応では、この点がウスイ語やトリブラ語と、ディマーサ語ではおおきくことなる。

22) ウスイ語も PBG \*k が ? で対応しているの、消失する過程にあるといえる。

23) トリブラ語では、PBG \*t は -r で対応するのがむしろ通則である。

24) 本稿では、Burling (2009) にある系統樹を参考に、かりに 4a の位置で分岐させている。

- Chatterji, Suniti Kumar. 1926. *The Origin and Development of the Bengali Language*. Repr. Calcutta 1985: Rupa & Co.
- Chelliah, Shobhana L. 1997. *A Grammar of Meithei*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Debbarma, Binoy. 2001. *Concise Kokborok-English-Bengali Dictionary*. Khumulwng: Language Cell, Education Department, Tripura Tribal Areas Autonomous District Council.
- . 2002. *Anglo-Kokborok-Bengali Dictionary: second edition with Bengali*. Agartala: Kokborok Tei Hukumu Mission.
- Grierson, Geroge A. ed. 1903. *Linguistic Survey of India*. vol. III, part II, Specimens of the Bodo, Nāgā, and Kachin groups. Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.
- 服部四郎 1957. 『基礎語彙調査表』東京：東京大学言語学研究室.
- 藤原敬介 2003. 「マルマ語の音声に関する考察」『京都大学言語学研究』22: 237-300.
- . 2008. 「ウスイ語文法の概要」『京都大学言語学研究』27: 81-124.
- Jacquesson, François. 2002. “An approach to Comparative Bodo-Garo phonology.” Paper presented at ICSTLL #35, 7-10 November 2002. Arizona State University, Tempe, Arizona, USA.
- . 2005. *Le deuri: langue tibéto-birmane d'Assam*. Leuven: Peeters.
- . 2008a. *A Kokborok Grammar (Agartala dialect)*. Agartala: Kokborok Tei Hukumu Mission.
- . 2008b. *Dimasa-English lexicon*. Brahmaputra Studies Database: <http://brahmaputra.vjf.cnrs.fr/bdd/spip.php?article50> (最終確認 2009 年 3 月 28 日).
- Jeffers, Robert J. 1976. “The position of the Bihārī dialects in Indo-Aryan.” *Indo-Iranian Journal*, 18: 215-225.
- Joseph, U. V. 2007. *Rabha*. Leiden: Brill.
- Joseph, U. V. and Robbins Burling. 2001. “Tone correspondences among the Bodo languages.” *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 24(2): 41-55.
- . 2006. *The Comparative Phonology of the Boro-Garo Languages*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.
- Kim, Amy, Seung Kim, Palash Roy and Mridul Sangma. 2007. *The Tripura of Bangladesh: A Sociolinguistic Survey*. Dhaka: SIL Bangladesh.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. Berkeley: University of California Press.
- . 2006. “Deltacism of laterals in Sino-Tibetan and elsewhere.” Ms. <http://stedt.berkeley.edu/pdf/JAM/DinguistDilemma-2006.pdf> (最終確認 2009 年 1 月 3 日).
- 西田龍雄 1989. 「ティブラ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第2巻』, 1117-1122, 東京：三省堂.
- Pai (Karapurkar), Pushpa. 1976. *Kokborok grammar*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.
- Riyang, Gitta Kumar. 2007. *Kāu bru abhidhān*. Agartala: Tribal Research Institute. (原文はバングラ語)
- Shafer, Robert. 1974. *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Walsh, D. J. n.d. *English-Bengali-Tipperah/Ushai dictionary*. Malumghat.
- Wood, Daniel Cody. 2008. *An initial reconstruction of Proto-Boro-Garo*. Unpublished MA thesis, University of Oregon.